伝統工芸とものづくり教育

Career Education for Engineers Learned from Traditional Craftsmen and Handicrafts

浦 川 宏

京都工芸繊維大学は、平成 18 年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(公募テーマ「実践的総合キャリア教育の推進」)に「創造性豊かな国際的工科系専門技術者の育成 ―伝統からイノベーションへ・ローカルからグローバルへ」¹⁾と題した教育プログラムを申請し、採択された。ここでは、その内容と実施したこととで得られた二つの驚きについて述べてみたい。

本学の卒業生・修士課程修了生の 90% 近くが、ものづくりの企業へと巣立っていく。彼らが今後ものづくりの技術者としてキャリア形成を進め、自信を持って仕事に従事できる、そのための基礎体力を身に付けさせることが本プログラムの目的である。専門分野を深く学ばせることの大切さは言うまでもない。しかし、それだけで十分であろうか。高性能・高機能だけを専門技術によって独りよがりにより自分勝手に追い求めるものづくりは前世紀のものになってしまった感がするのは著者だけではあるまい。使用する人間にとって安全で、安心してしかも快適と感じるものが求められている。このようなものづくりにはさまざまな立場あるいは異なった専門性をもつ人たちと共に働くことが必要になるのではないだろうか。適切な材料は何か、構造はどうするのか、より使いやすい形は、より安くするには、美しく見せるには、などなど、新しい世紀においては多様な側面からものづくりを見つめることが必要であろう。これらをおおそひとりで解決しようとしても、これは甚だ難しい話である。従って、一見全く異なった分野の人たちとの共同作業・コミュニケーションが重要になってくる。本学のキャンパスでは、造形・デザインを主に専攻する学生と工学を主に専攻する学生が混在し学習している。そこで、意識して異分野の学生が混在する少人数グループを作り、ものづくりに関する題材を与え、それを基にグループ内で議論を重ね、ひとつの新しいコンセプトなどを提案・発表する演習科目を設けた。この演習の具体的な目的は、グループ内議論を十分に行うことで異分野の人の視点を理

解することができ、かつ自分の考えや思いを相手に上手く伝える異文化リテラシーを獲得することにある。発表内容よりも、それに至るプロセスを重視する教育プログラムである。また、国際的に見れば、異文化リテラシーが真の国際人として必要とされる。留学生を本プログラムに巻き込むことで異文化リテラシー教育としても位置づけている。日本文化を英語で語ることができる技術者養成を目指したい。

日本文化を担ってきた伝統工芸の工房が京都には数多くある。その地域性から、学生が取組むものづくりの題材として伝統工芸の工房における体験学習を取り上げた。伝統工芸が本学の学生にとって魅力的であることも選択の理由のひとつである。今年度は、金彩、清水焼、西陣織、組紐、調べ緒、京弓、京壁、京瓦、友禅及び鋳金具の工房にお願いした。本プログラムの中心となる科目「京の伝統工芸一技と美」は、グループごとにひとつの工房を訪問し、匠の話を聞き、その技と作品に直接触れる体験学習から始まる。次に、この体験から学んだことを生かし、伝統工芸のものづくりからイノベーションへ繋がる斬新なアイデアや作品、あるいは伝統工芸の問題点などについてグループ内で議論し、まとめあげて発表することへと繋げる。今年度の発表では、金彩の工房を訪問したグループは、伝統工芸を残す意義を考え、日本の文化や歴史に触れる機会を増やすことを提案し、その具体策を報告した。京弓のグループは伝統工芸に対する見方がどのように見学の前後で変わったかを詳しく話した。京瓦のグループは、体験から新しい製品のコンセプトを提案した。すべてのグループが体験を生かし、十分な議論をし、すばらしい発表に繋がった。

今年度のプログラムの実施を終えて、気づき、驚いたことが 2 点ある。それらは学生たちの 2 つの感動である。発表会の場でそれらがひしひしと伝わってきた。一つ目は、時間をかけて完成させた発表の充実感と達成感からくる、涙さえも伴う感動である。もうひとつは、伝統工芸の匠のものづくりにかける姿勢と情熱に対する感動である。「どうしてあんなにひとつのことにこだわりを持ちながら打ち込めるのか」「ものづくりはすごい」が学生たちのことばである。プログラムの計画段階で、ごく短期間の体験で何が期待できるのかとも思ったことがあったが、この 2 つの感動がその心配を打ち消してくれた。ひょっとするとこの感動はわれわれが意図したものよりも大きなものを学生に与えたかもしれない。

1) 取組のホームページ：<http://www.taft.kit.ac.jp>

HIROSHI URAKAWA
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町1
Tel: 075-724-7567 Fax: 075-724-7564
E-mail: urakawa@kit.jp
〈専門〉ソフトマテリアル物理学、染色化学
〈趣味〉魚と遊ぶこと。料理。パソコンの自作。